

修士論文（要旨）
2010年1月

大学生の孤独感と依存の関連

指導 井上直子 准教授

国際学研究科
人間科学専攻 臨床心理学専修
208J5005
岡崎千絵

目 次

第1章 問題の背景と所在

1. 孤独感について 2
 - 1-1. 孤独感の定義
 - 1-2. 孤独感の意義
 - 1-3. 孤独感の原因
 - 1-4. 孤独感とメディアの関係
 - 1-5. 孤独感を測定する尺度について
 - 1-6. 青年期の孤独感について
 - 1-7. 本研究における孤独感の定義と位置づけ
2. 青年期について 8
 - 2-1. 青年期について
 - 2-2. 青年期の発達課題
3. 依存について 10
 - 3-1. 依存の研究
 - 3-2. 依存と自立
 - 3-1. 本研究における依存の測定

第2章 目 的 13

第3章 方 法 14

1. 調査方法
2. 調査対象
3. 調査時期

第4章 結 果 15

1. 孤独感について
2. 依存について
3. 孤独感と依存の関連について

第5章 考 察 26

1. 孤独感類型尺度について
2. 依存について
3. 孤独感と依存の関連について

第6章 結 論 31

謝 辞

参考文献

添付資料

I. 問題の背景と所在

青年に対する理解を深める為に必要とされる概念に孤独感がある。落合（1989）は、二つの視点から青年期の孤独感に注目した。一つは、自我の発見にともなって必然的に感じる（個別性を理解しているか否か）という視点。もう一つは、青年の理想を求める対人関係上での特徴が孤独感を感じさせる（人間どうし理解・共感しあえるか否か）という視点である。そして、この二つの視点から孤独感類型判別尺度（落合，1974）を作成した。この尺度は、それまで多くの年齢層に使用されてきた改訂版 UCLA 孤独感尺度（工藤・西川，1983）とは異なり、青年を対象としているという点で新しい。

また、青年期の対人関係を捉える観点の一つとして依存があげられるが、従来の研究では、青年期以降の依存は退行的な心性として問題視されてきた（江口，1966）。しかし、研究が進むにつれ、依存と自立は必ずしも対極概念とは考えられないとされ（江口，1966）、依存は人に普遍的なもので発達的に消失するのではなく、より成熟したものに変わっていくという見方がなされ始めている（関，1982）。加えて、竹澤ら（2004）の研究では、健康的な日常的な対人関係において、依存は病的なものというより、適応的な役割を果たしている可能性を述べ、依存するという事は、むしろ「基本的信頼感や他者信頼感があるからこそ他者にゆだねることができる」（p310）と自らの考えを述べた。そして、依存を対人関係においてより積極的に適応的なものとして捉え、女子大学生において依存欲求が高い人は他者信頼感が高いという、依存の肯定的・適応的特徴を見出した。

江口（1966）は、従来の依存についての研究を総括した上で、依存の中に3つの状態が予想されることを示した。第1が従来のいわゆる「依存的」な状態、第2が適度に依存した状態、つまり自立性の獲得されていく状態、そして第3は依存要求の欠如している状態である。本研究では、江口（1966）の考える「適度な依存」という考えを汲んでいる心理的自立尺度（高坂・戸田；2005）を使用して、青年の依存を捉えようとしている。

II. 目的

本研究では、青年期における孤独感と依存がどのような関連を持っているのかを検討することを目的とする。仮説として、孤独感の4類型の中で、他者と最も安定した関係を築くことができるとされているD型の青年たちは、心理的自立得点が他の種類より高く、適度な依存をしているといえるのではないかと予想する。また、その他にも孤独感と依存との関係のあり方に特徴や例外はあるかなどを調べる。

III. 方法

2009年7月に東京都の私立大学に通う大学生（男子68名、女子166名）に質問紙法を実施した。なお、一斉配布、回答の後、一斉回収を行った。欠損などが見られる被検査者を除外したところ、分析対象は213名であった。質問紙は、落合（1989）によって作成された孤独感の類型判別尺度（16項目5件法）と、高坂・戸田（2006b）によって作成された心理的自立尺度（30項目7件法）、フェイスシートで構成された。

IV. 結果

各尺度の分析の結果、孤独感については、最も成熟しているとされる「個別性を理解しており、かつ、人間どうし理解共感できると考える D 型の孤独感」が先行研究(落合, 1989)の結果より割合は減少したものの、半数を占めた。また、依存については性差・きょうだい順位共に有意な差は検出されなかった。

孤独感と依存の関連については、孤独感の類型間の比較において、「相手の気持ちを思いやることができる」などの質問項目がある「対人関係」の下位尺度のみから有意な差が見られた。その後の検定により大小関係は C>D>A という順であった。

V. 考察

本研究では、孤独感と依存の関連から見ると、現代青年の依存のあり方として、責任感がある人ほど価値判断実行を行い、自分を統制できる人ほど価値判断実行を行うということがわかった。

孤独感の類型別の依存の在り方の特徴としては、A 型(情緒的・依存的融合状態の中にいるものが感じる孤独感)の青年は、他者の気持ちや意向に対して意識をして行動をしていないが故に、適切な対人関係を育むことが困難であろうと考えられ、個別性の認識をしていないために、価値判断実行を行うこと、社会的視野の狭さ、そして自己統制の低さなどが挙げられた。C 型(他人への無関心・人間不信をもっている状態での孤独感)の青年は、理解共感できるとは考えていないが、他者への尊重と配慮をもって行動することが出来ていたこと、自分自身が生きていくために必要と考える責任や自己統制、そして価値判断実行に強く意識が向いていること、などが挙げられた。最後の D 型(同感ではない共感と、人間の代替不可能性の自覚とを特徴とした孤独感)は、個別性の理解をしていることから、適切な対人関係を営むことができ、それによって、自分の代わりになる人間はこの世にはいないという個人の自覚が芽生え、自分に厳しい姿勢をもって物事を捉え価値判断実行していると考えられる。そのような意識を持つことで、社会的な視野が広がり、将来志向も養われていっていると考えられる。

VI. 今後の展望・課題

今後の展望としては、孤独感については新しい尺度の開発も視野に入れて研究に臨む必要性があること、依存については更に発達の視点を取り入れ対象年齢に差をつけて、孤独感との関連を調べることを組みたいと考えている。

参考文献

- 馬場禮子・永井徹 1997 ライフサイクルの臨床心理学 培風館
- 江口恵子 1966 依存の研究 教育心理学研究 14 (1) 45-58
- 原田茂訳 1973 青年の心理 協同出版
- 広沢俊宗・田中国夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要 49 179-188
- 保坂亨 1996 子どもの仲間関係が育む親密さ-仲間関係における親密さといじめ 現代のエスプリ 353 45-51
- 五十嵐祐・吉田俊和 2003 大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響 心理学研究 74 (4) 379-385
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念の関係 教育心理学研究 28 (4) 72-76
- 高坂康雅・戸田弘二 2006a 青年期における心理的自立 (II) -心理的自立尺度の作成- 北海道教育大学紀要(教育科学編) 56(2) 17-30
- 高坂康雅・戸田弘二 2006b 青年期における心理的自立 (IV) -心理的自立の発達の变化- 北海道教育大学紀要(教育科学編) 57(1) 135-142
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) -孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討- 実験社会心理学研究 25 115-125
- 松井洋 2004 自己理解のための青年心理学 八千代出版
- 西平直喜・吉川成司編著 2000 自分さがしの青年心理学 北大路書房
- 落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造 (I) 教育心理学研究 22 162-170
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982 LONELINESS: A SOURCEBOOK OF CURRENT THEORY AND THERAPY, John Wiley & Sons, Inc. (L.A.ペプロー、D.パールマン編 加藤義明監訳 1988 孤独感の心理学 誠信書房)
- 高垣忠一郎 1988 自分をつくる 心理科学研究会(編) かたりあう青年心理学 青木書店 55-82
- 高橋恵子 1968 女子青年における依存性の発達 依田新(編) 現代青年の人格形成 金子書房 21-44
- 竹澤みどり・小玉正博 2004 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究 52 310-319
- 依田新 1963 青年心理学 培風館